

令和2年度地域生涯学習活動実践セミナー

地域の未来を担う自己肯定感・ 自己有用感の高い若年層の育成



國學院大學 青木 康太郎

令和2年度地域生涯学習活動実践セミナー

地域の未来を担う自己肯定感・自己有用感の高い若年層の育成

〔講義4〕

自己肯定感・自己有用感を 高める社会教育事業の在り方

1. 自己肯定感が低い子どもの特徴
2. 自己肯定感をはぐくむために



自己肯定感が低いと

何が問題なのか？

1. 自己肯定感が低い子どもの特徴

自己肯定感が高い子どもの特徴



進路の目標が明確



学習意欲や授業の
理解度が高い



友人関係が良好



課外活動に積極的

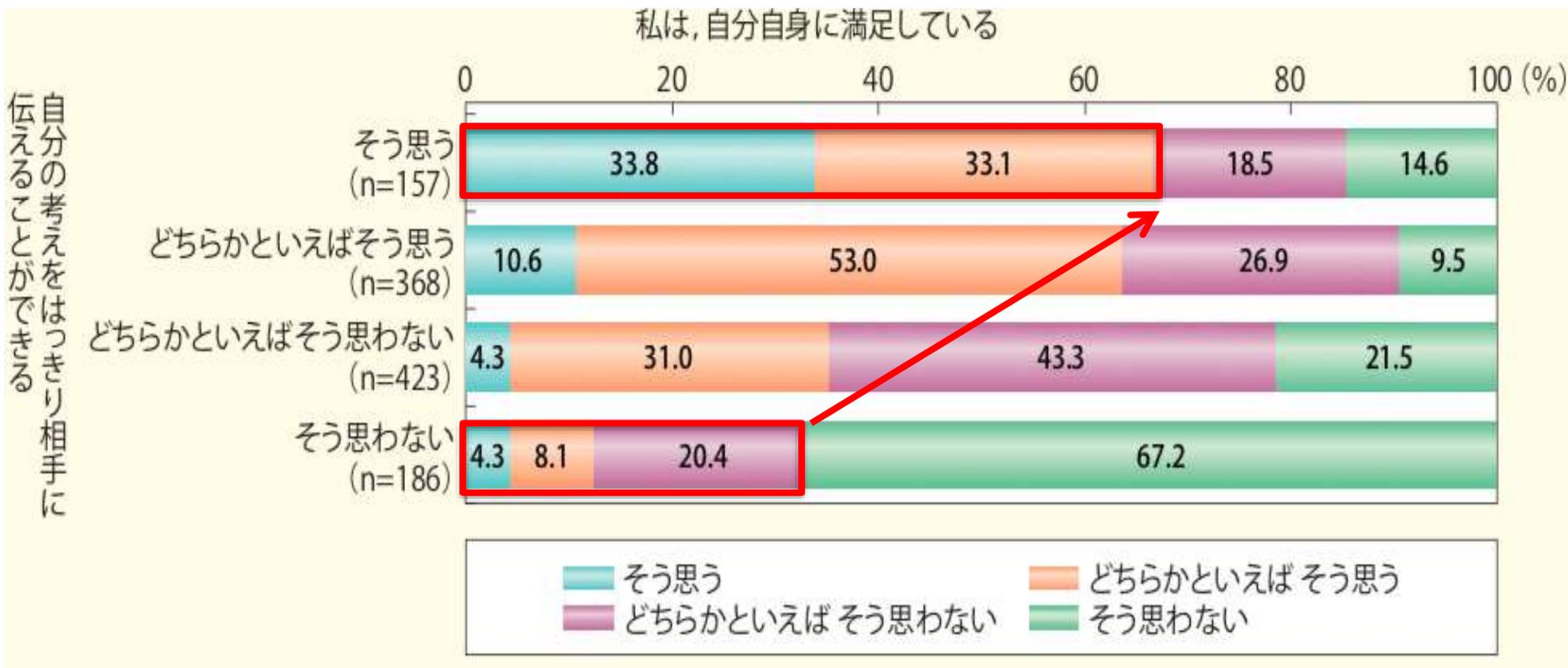


教師など大人との
関係が良好

逆境に強い

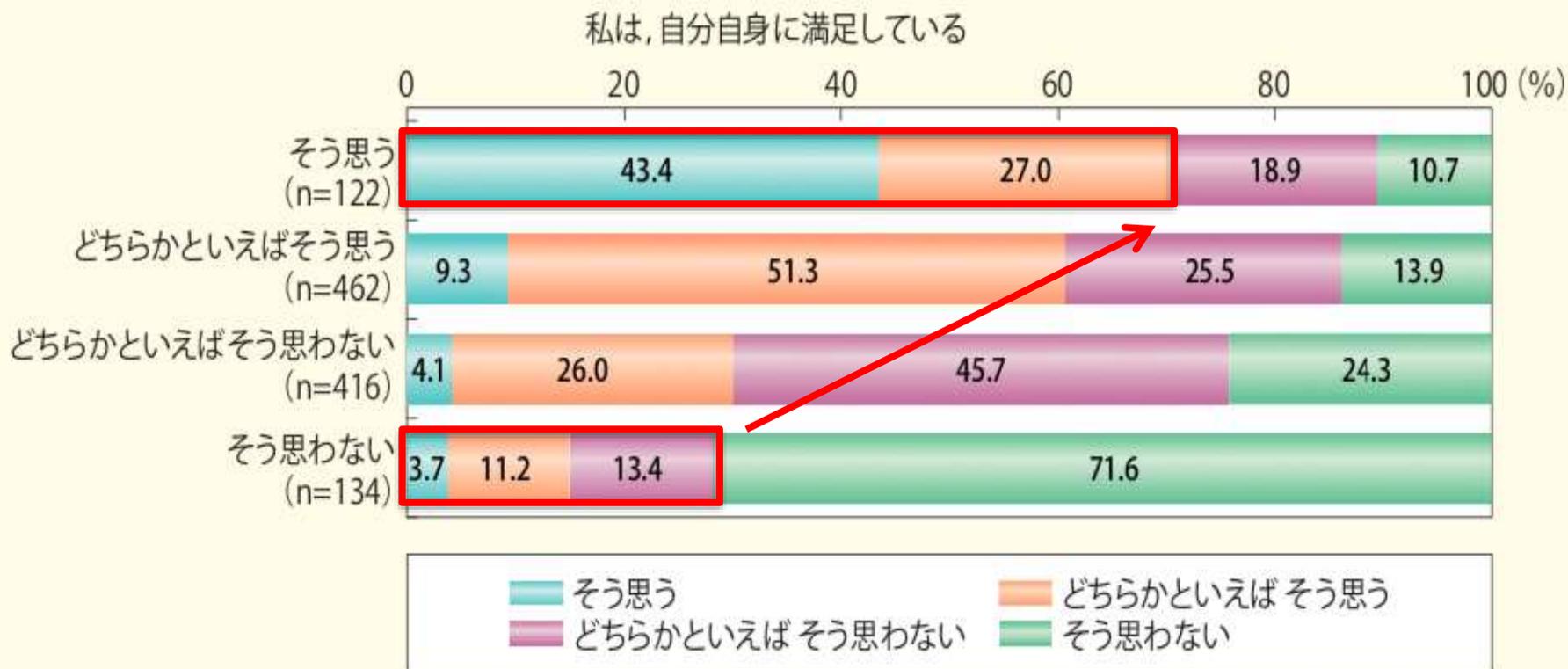
いじめに屈することも少なく、
他人の目を気にしない、失敗
に動じない、悪い仲間の誘い
を断り、「いやだ」と拒否する
ことができる

自分の考えをはっきり相手に伝えられる若者ほど、 自分自身に満足している若者が多い



うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む 若者ほど、自分自身に満足している若者が多い

うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む



自己肯定感が低い子どもにみられる特徴



暴力行為をする



やる気がおきない



友だちとうまくいかない



自分で判断ができない



遅刻・欠席が多い



授業の理解度が低い

自分より弱い立場の他者に向かったり、自分を守るために不登校やひきこもりなどになり、社会との接点をもたなくなったりすることもある。

どういう子どもが自己肯定感が低くなりやすいのか？

- ✓ 学力や体力に自信がない。
- ✓ 褒められたことや家庭でのしつけが少ない。
- ✓ 基本的な生活習慣が身につけていない。
- ✓ 道徳心や規範意識が低い。
- ✓ 自然体験やお手伝いといった体験が少ない。
- ✓ 将来に不安を感じている。
- ✓ 学校生活や家庭生活、友人関係がうまくいっていない。
- ✓ 保護者の自己肯定感も低い。

国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動等に関する実態調査」(平成26年度調査)

国立青少年教育振興機構「高校生の生活と意識に関する調査報告書」

内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」

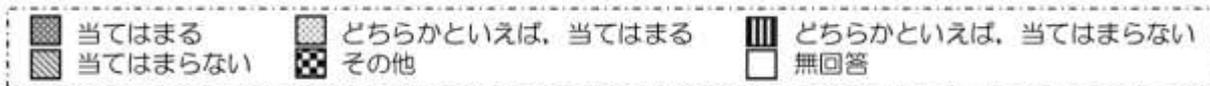
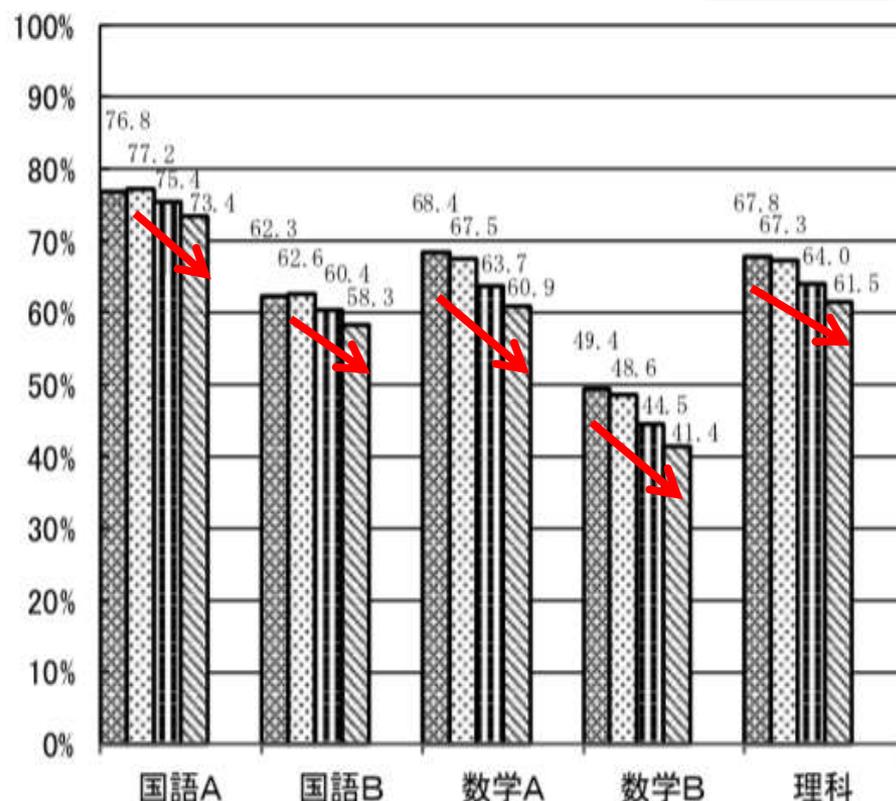
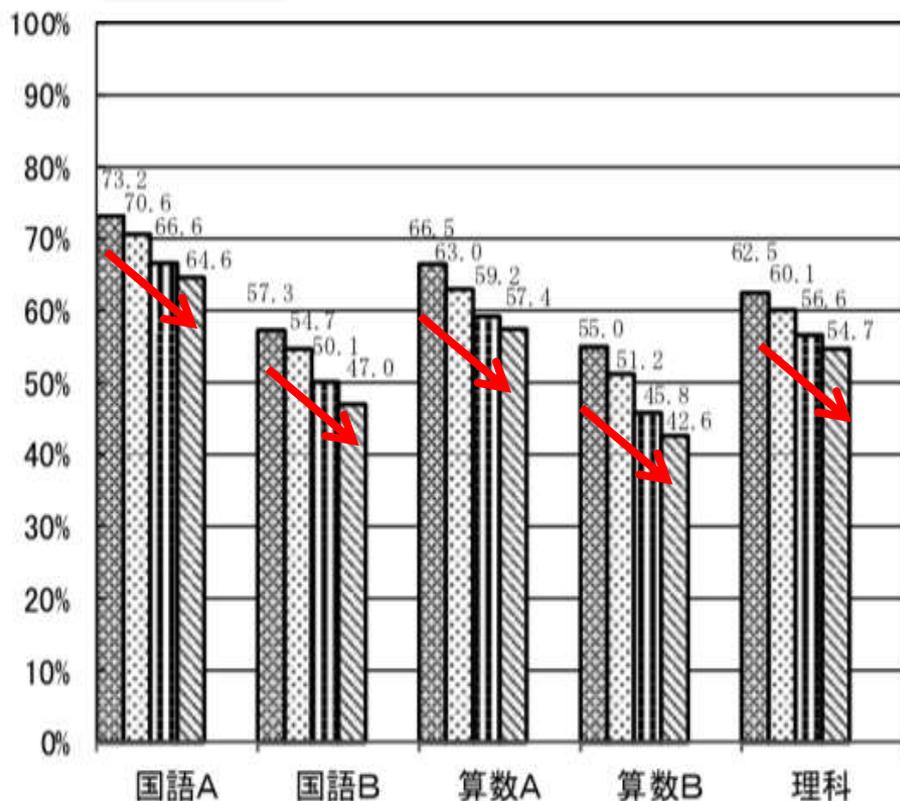
学力が下がるにつれ、

自己肯定感が低くなる傾向がみられる

小学校

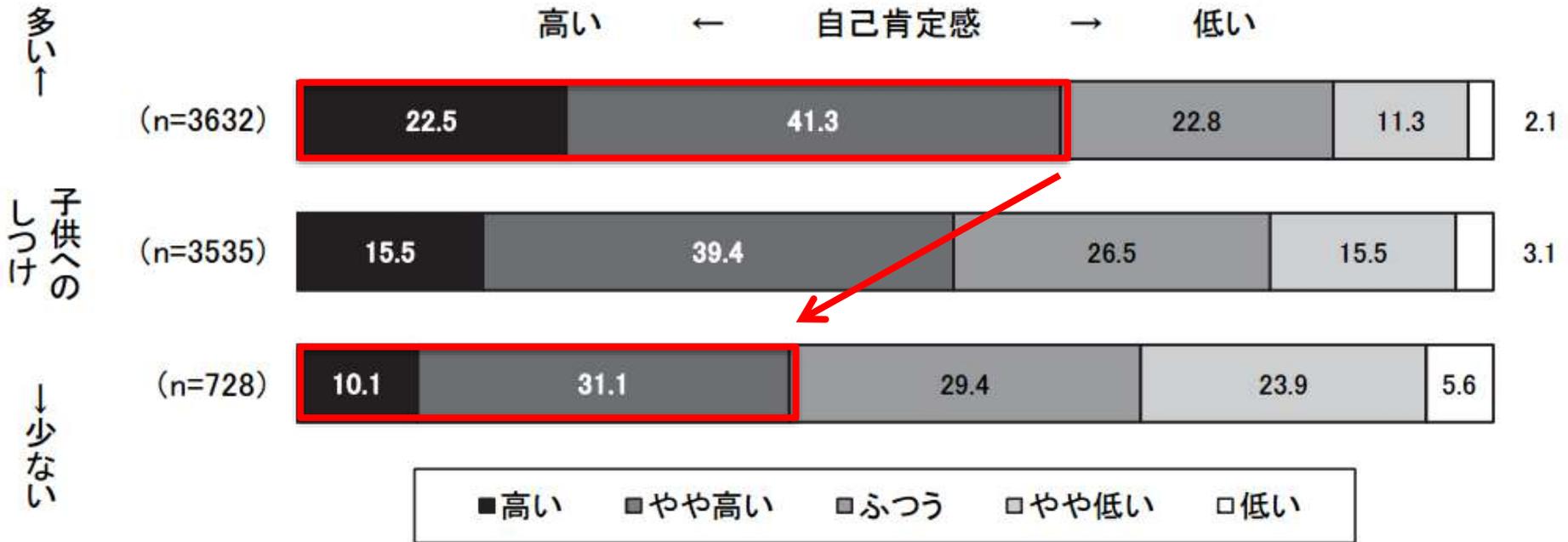
学力別「自分には、よいところがある」の割合

中学校



文部科学省
「全国学力・学習状況調査」(平成30年)

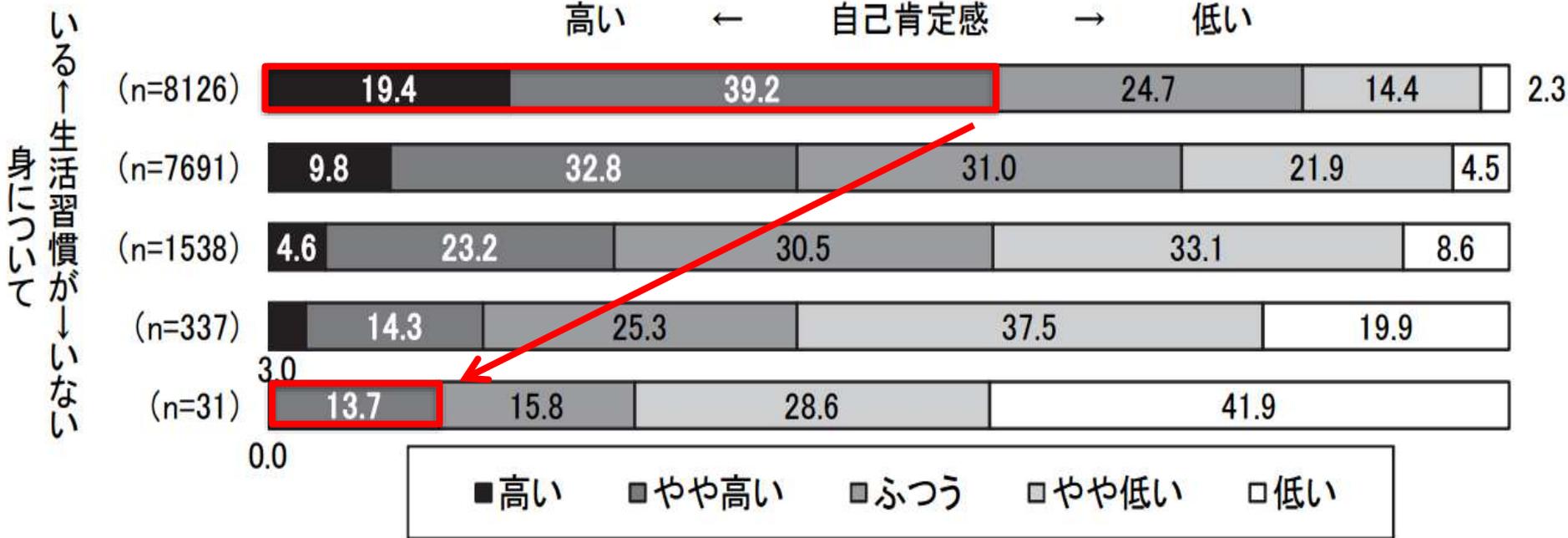
しつけが少ない家庭の子どもほど、 自己肯定感が低い傾向がみられる



子供へのしつけに関する項目

- ・夜ふかしをしないで早く寝ること
 - ・毎朝、起きなければならない時間にきちんと起きること
 - ・毎朝、きちんと朝食を食べること
 - ・家事の手伝いをする事
- 等

基本的な生活習慣が身についていない子どもほど、 自己肯定感が低い傾向がみられる

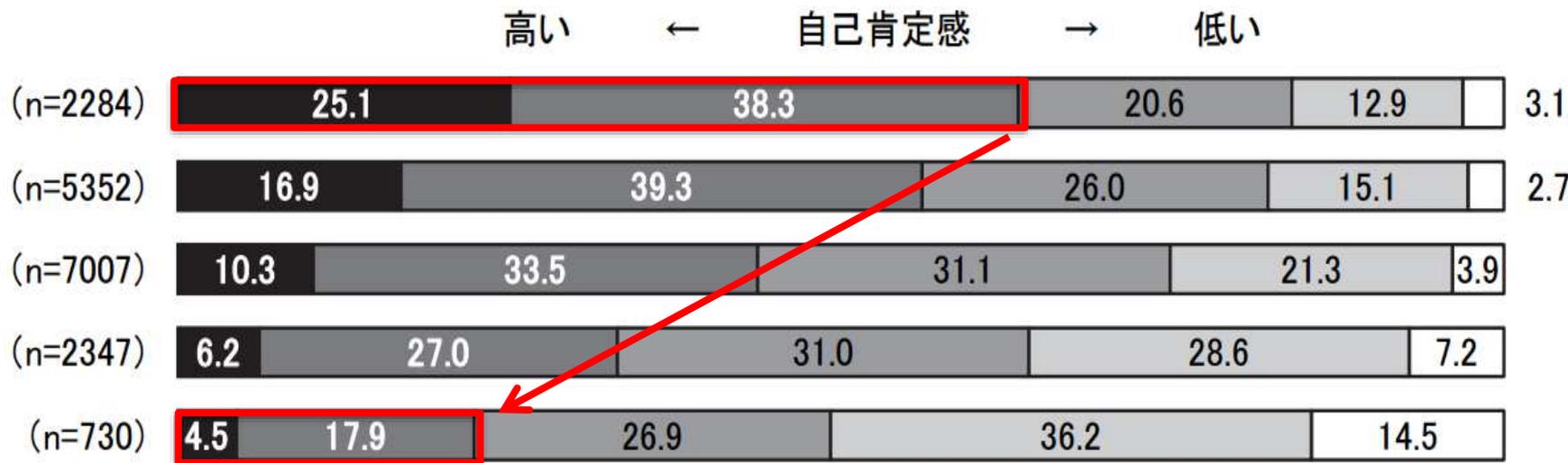


生活習慣に関する項目

- ・自分のふとんの上げ下ろしやベッドを整頓すること
- ・朝、人に起こされなくて自分で起きること
- ・家であいさつをすること
- ・近所の人や知り合いの人にあいさつをすること 等

お手伝いの経験が少ない子どもほど、 自己肯定感が低い傾向がみられる

多い↑お手伝い↓少ない

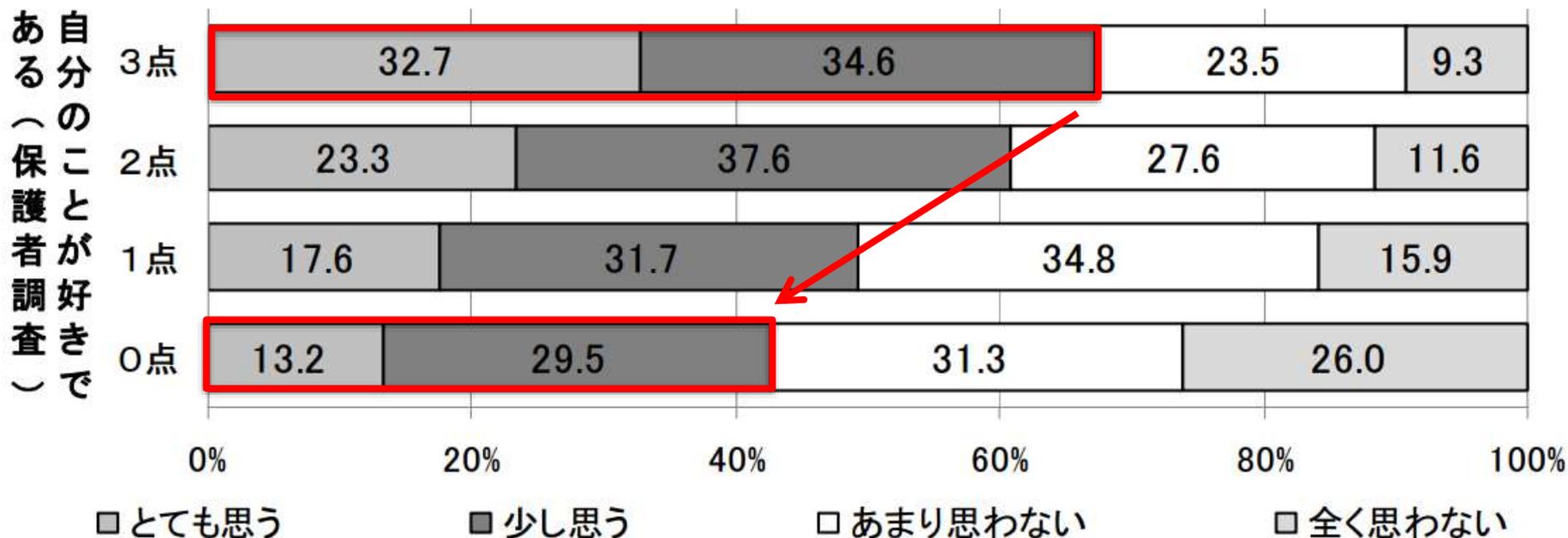


お手伝いに関する項目

- ・買い物のお手伝いをする事
 - ・新聞や郵便物をとってくる事
 - ・靴などをそろえたり磨いたりする事
 - ・食器をそろえたり片付けたりする事
- 等

保護者の自己肯定感が低いと、 子どもも自己肯定感が低くなる傾向がみられる

今の自分が好きだ(子ども調査)





自己肯定感をはぐくむ視点

2. 自己肯定感をはぐくむために

子どもの自己肯定感をはぐくむ視点

- ✓ 幼児期から学童期初期(9, 10歳)は自己肯定感を**伸ばす**!
- ✓ 前思春期から思春期は自己肯定感を**低下させない**!
- ✓ 思春期以降は低下した自己肯定感を**回復させる**!

参考 古荘純一(2009)「日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか」

そのためには……



愛される経験



褒められる経験



認められる経験



感謝される
(役に立つ)経験

自己肯定感を高めるキーワード

かかわる

安心・信頼を伝える

良さをを見つける

自分の長所に気づかせる

褒める・認める

自分の力を実感させる

可能性を広げる

色々な経験をさせる

励ます

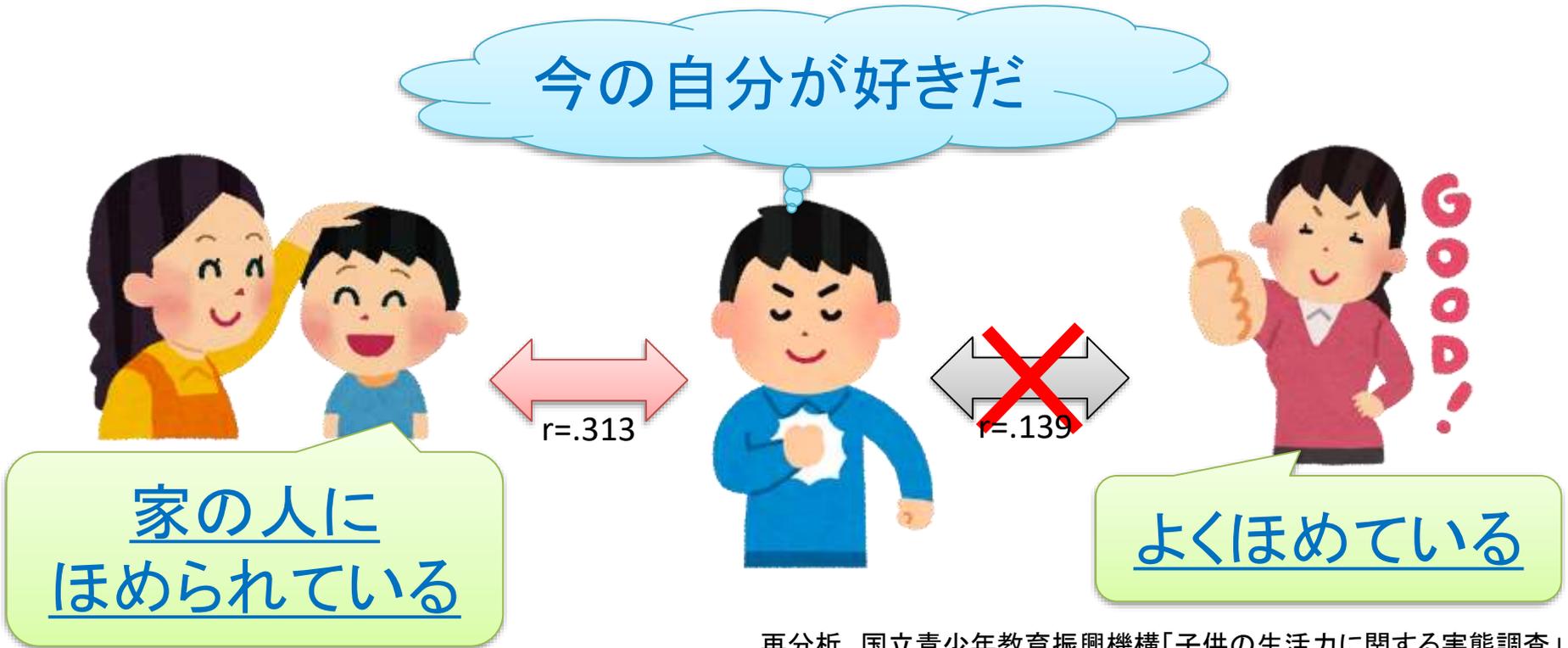
目標を持たせる



こういった視点をもちながら、様々な場面で積極的に子どもたちにかかわっていくことで、自己肯定感をはくぐむことができる。

褒める・認める

子どもが努力したり工夫したりしたことを認めてあげる



再分析 国立青少年教育振興機構「子供の生活力に関する実態調査」

大人が目線で褒めるのではなく、子どもの「褒められたい」基準や水準を考え、子どもなりのこだわりで努力したり工夫したりしたことを認めてあげることが大切

自己肯定感を高めようとして起きる弊害

- ✓ 自分を高く評価するため、他者を相対的に低く評価し、その価値を軽視することで(他者軽視)、他人に比べて自分は有能で優れていると評価しようとする。

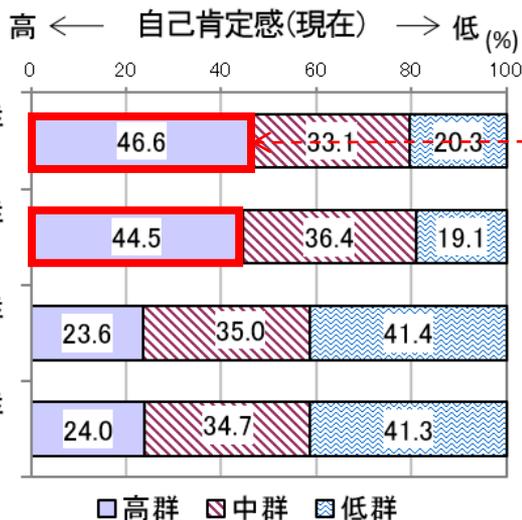
公共の場での迷惑行為や他者に対する傲慢な態度、道徳心の低下といった問題につながることもある。

- ✓ 何か失敗した時に適切にフィードバックせず、自己肯定感を高める働きかけばかりを行うと、自分の行為に対して適切な評価ができなくなり、何が望ましくて何が望ましくないのか区別できなくなる。

自己評価は高いのに、他者評価が伴わないことでストレスや挫折につながることもある。

子供の頃、親や先生、近所の人から「褒められた経験」が多かった人ほど、大人になってからの自己肯定感が高い

親

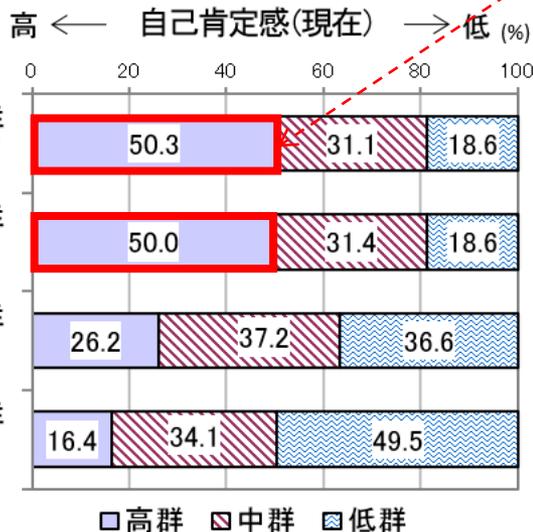


(子供の頃) 親に褒められた・厳しく叱られた経験

そのうち、

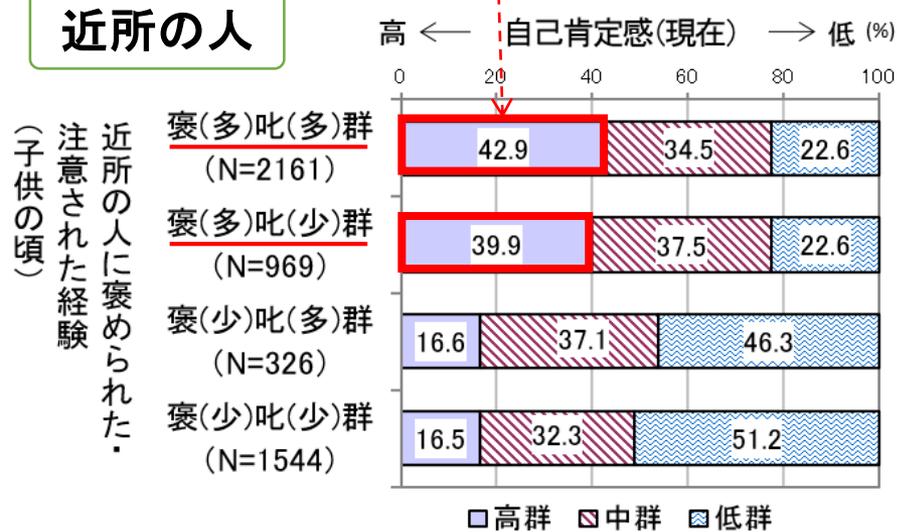
子どもの頃に「**厳しく叱られた経験**」が多かった人ほど、自己肯定感が高い傾向がみられる。

先生



(子供の頃) 先生に褒められた・厳しく叱られた経験

近所の人



(子供の頃) 近所の人に褒められた・注意された経験



家庭、学校、地域で取り組めること

2. 自己肯定感をはぐくむために

教育再生実行会議(平成29年6月1日)

「自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上」(第十次提言)

○大人が子供たちに向き合う際には、

- ✓ 子供の良いところを褒めたり認めてあげたりすること
- ✓ 大人が愛情を持って積極的に関与し続ける姿勢を示すこと
- ✓ 子供に関わる大人自身も自己肯定感を持って子供と接すること
- ✓ 子供の発達段階に応じて接すること
- ✓ 自分が社会の一員であることを認識できるようにすること

○国、地方公共団体や関係する NPO 等においては、

幼児教育の充実、家庭教育支援の充実、多世代交流や異年齢交流等の推進、様々な体験活動の充実に取り組む

多世代交流や異年齢交流等の推進

学校では

- ✓ 他者や集団・社会のために役に立つ経験を通して自己肯定感を育むことができるよう、特別活動等において、学級や学校の中で役割を分担し、協力して取り組む機会を充実するとともに、異年齢交流を通して、年少者の世話をしたり、リーダーシップを発揮したりする機会を充実させる。

地域では

- ✓ 思春期にある中学生や高校生が、学校以外の場面で、年齢の近い大学生や年下の幼児、小学生、地域の高齢者、民間機関の職員等と様々な活動を通じて交流することで多様な価値観があることを学べるよう、NPOや民間機関等と連携し、多世代交流や異年齢交流の機会の充実に向けた取組を推進する。
- ✓ その際、地域の教育資源の活用が進むよう、地域学校協働活動推進員の配置や研修を促進する。

様々な体験活動の充実

青少年の体験活動の推進に関する調査研究

- ✓ 自己肯定感をバランスよく育むには、自然体験活動や集団宿泊体験、職場体験活動、奉仕体験活動、文化芸術体験活動といった様々な体験活動を通じて、達成感や成功体験等を得るとともに、失敗や挫折を経験したときに、自分を受け入れ、課題に立ち向かう姿勢を身に付けることが重要である。
- ✓ 農山漁村にある豊かな自然や青少年教育施設などの地域資源を活用しつつ、NPOや民間機関等と連携しながら、体験活動を積極的に推進する。
- ✓ その際、家庭の経済事情にかかわらず、全ての子供たちに体験活動の機会が与えられるよう、取組を進める。



今後の
社会の変化に
対応した
多様な
体験活動事例集

令和元年度文部科学省体験活動推進プロジェクト
自己肯定感向上プロジェクトモデル事業

めざせ!アウトドアマイスター

ジュニアスタッフ研修会



アウトドア活動の指導体験



丸太きり
の指導



火起こし
の指導



手旗
の指導

アウトドア活動の指導体験を通じて、
「人から感謝されたこと」
「人の役に立っていると感じたこと」
を多く経験した参加者のほうが自己肯定感の
向上効果が高くなる傾向がみられた。

子どもの成長を支える20の体験

子どものために私たち大人にできることは？

私たち大人にできることは？

多様な体験を土台とした子どもの成長を支える環境をつくること

児童、社会を生き抜く資質・能力を身につける大人になるためには、子どもの頃から様々な活動に挑戦し、多様な体験を積み重ねていくことが必要です。そのためにも、周りにいる大人が、子どもの生活環境の中にも親愛的、計画的に多様な体験の機会を提供していくことが大切になります。

Point 1

「多様な体験を土台とした子どもの成長」を支える環境とは？

青少年に対し、社会的自立に向けた様々な成長を促していくためには、家庭や学校・地域といった様々な場面で実践的に行なわれる多様な体験を確保し、それらの体験を通じて心身ともに健全な人間形成を支えていくことが大切です。

国立青少年教育振興機構では、「体験活動を通じ

た青少年の自立」を目指し、青少年が社会的に自立していくために必要な子どもの頃の体験や体験によってつくられる資質・能力の確保について調査研究を進めてきました。そして、これまでに研究成果を基に、育ちた大人へと成長する過程において大切になる子どもの頃の体験と、家庭、社会を生き

抜くために必要となる資質・能力の開発を体系的に整理し、今後、子どもの生活環境の中にも親愛的、計画的に多様な体験の機会を提供していく際の指針として「多様な体験を通して育ちた大人への成長を支える20の体験」と「体験を通して育ちた大人への資質・能力」を取りまとめました。

Point 2

“体験する”ということの考え方

子どもの頃に多様な体験をするとは、子どもの成長にとって大きな意味があります。しかし、いくらかの体験をしても、ただ体験させられるだけでは得られる成長が少なかったり、意味を成すことが少なかったりすることがあります。子どもの成長を支える体験として「20の体験」を挙げましたが、これらの体験を子どもにさせれば、社会を生き抜くために必要な資質・能力が自然と身につくことではありません。

「体験する」ということは、育ちながら実践的・主体的に活動していくこと、それを通して得られる成長や気づき、学びを最大限に活かしていくことと捉えています。そして、これらの体験を通じて得られる成長や気づき、学びが、子どもの成長を支える大きな力になると考えられているのです。



国立青少年教育振興機構のホームページ「広報資料(ダウンロード)」からダウンロードできます。

家庭、学校、地域で取り組めること

家庭

↑
連携

- ✓ あいさつ・お手伝い・規則正しい生活の励行
- ✓ ルールやマナーのしつけ
- ✓ 家族行事(家族での外遊び・スポーツが有効)
- ✓ 子どもと向き合う時間をつくる

学校

↑
連携

- ✓ 基礎学力の向上
- ✓ 異年齢交流(人の役に立つ経験をする)
- ✓ 様々な体験活動の実施(新たな自分の発見)
- ✓ 地域人材の活用や交流

地域

- ✓ あいさつ・声かけの励行(ナナメの関係づくり)
- ✓ 地域交流イベントの実施
- ✓ 子育て支援(保護者の自己肯定感を高める)